



レクチャー・コンサート 21世紀のショパン像

～新書簡集出版を祝って～

2012年11月17日(土)

14時30分 開演 (開場 14時)
北海道大学情報教育館 3階
スタジオ型多目的中講義室(北17西8)



レクチャー 三浦 洋 (北海道情報大学教授) =写真上=
ピアノ演奏 坂田 朋優・安田 文子・高橋 健一郎



プログラム

◆ 第1部 21世紀のショパン像

全書簡集新訳の意義について。正しい表記への修正や、ショパンが書いた「シャファルニャ通信」に関する新たな解釈について。

坂田朋優 マズルカ 第13番イ短調 Op.17-4
ワルツ 第13番変ニ長調 Op.70-3
ポロネーズト短調



◆ 第2部 イタリアの影

ショパンが近代教育で受けた多文化的な影響。コンスタンチアのこと、ショパンの教師同士の確執、「芸術」という言葉とショパンの関係についてなど。

安田文子 ピアノ協奏曲 第2番へ短調作品21(ピアノ独奏版)
ノクターン 第2番変ホ長調 Op.9-2



◆ 第3部 バラードの誕生

ミツケヴィチやヴィイトフィツキなどポーランドの詩人たちがショパンに与えた影響。バラード第1番が、その後のショパンの作品に与えた影響を考える。

高橋健一郎 バラード 第1番ト短調 Op.23



主催：北海道ポーランド文化協会 後援：駐日ポーランド共和国大使館
交通：札幌市北区北17西5 地下鉄南北線「北18条駅」より徒歩5分(北図書館隣り)
お問い合わせ先/090-6447-1700(佐光)



第63回例会 報告



Happy 25th Anniversary !



レクチャー・コンサート

21世紀のショパン像

～新書簡集出版を祝って～

ポーランドで刊行が開始された新編集の書簡全集の日本語版が出版されたことを記念して、昨年11月17日（土）に北海道大学情報教育館 スタジオ型多目的中講義室にて北海道ポーランド文化協会第63回例会レクチャー・コンサートを行いました。

安田 文子

ショパンの命日が10月17日であること、そして北海道ポーランド文化協会の元副会長で、日本におけるショパンのピアノ教育の草分けであり私の恩師でもある遠藤道子先生が11月24日に亡くなられて、その約1年後ということ追悼の意味を込めて2012年11月17日に行うことにしたのです。

音楽評論家、ショパン研究の第一人者である三浦洋先生がお話しをされ、そのお話にちなんだショパンの曲を坂田朋優さんと高橋健一郎さん、そして私の3人で演奏しました。

新書簡集はポーランド語原文から訳された初めての日本語版で、まさに700ページを越し、ショパンをとりまく人物、生活環境、政治的・社会的・文化的背景に関する詳細な注釈がぎっしりと書き込まれていて、その内容の充実ぶりには驚くばかりです。

[第1部]のテーマは、21世紀のショパン像

～全書簡集新訳の意義について。正しい表記への修正や、ショパンが書いた「シャファルニヤ通信」に関する新たな解釈について～

今まであったシンドフ版やヘドリー版は、正確に記されているものもなければ、量も十分ではありませんでした。新書簡集では完全に厳密な校訂のもとに、ポーランド語から日本語に直接翻訳されていて、ようやく本来の意味でのショパン像が気付かれるきっかけになるとご説明されました。

また新書簡集では、ポーランド語の発音に忠実にカタカナ表記されています。「マズルカ」を「マズレ

ク」にですとか、ショパンが書いたところだけ「ミツキエヴィチ」が「ミチキエヴィチ」となっています。これは間違いではなく、ミツキエヴィチの故郷のリトアニアのノヴォグルデク地方ではこう綴るのだそうです。

ショパンは少年時代、ポーランド北部のシャファルニヤ村で夏休みを過ごしましたが、ワルシャワにいる両親にシャファルニヤ通信という題名を付けて新聞風の手紙を送っています。その紙面は国内ニュースと国外ニュースに分けられていますが、ポーランド三分割の結果、実際にシャファルニヤ村の近くをロシア領とプロイセン領の国境線が走っていて、ショパンもこの国境線を越えて往来していたことに関連しているのだそうです。

私は留学中、シャファルニヤ村に行ったことがありますが、のどかな田園風景が広がっていて、土着的というか土の匂いがするという風情でした。ホテルもないので農家のお宅に泊めてもらい、朝はたくさんのニワトリの鳴き声で起きたことが印象に残っています。多分ショパンが過ごした時の村の様子とほとんど変わらなかったのではと思います。

そして坂田朋優さん=写真次ページ左上=が、マズルカ 第13番イ短調 Op.17-4、ワルツ第13番変ニ長調 Op.70-3、ポロネーズ ト短調を非常に美しく、かつ知的に弾いて下さいました。





〔第2部〕はイタリアの影というタイトルで、ショパンがイタリアの文化から受けた影響についてです。

～ショパンが近代教育で受けた多文化的な影響。コンスタンチアのこと、ショパンの教師同士の確執、「芸術」という言葉とショパンの関係についてなど～

ショパンは学生時代イタリア語を勉強していて、手紙の中でも時々冗談のように使っていてイタリア語との結びつきは濃かったようです。当時の19世紀前半のヨーロッパで流行していたロッシーニやベリーニのオペラが、ショパンの1番お気に入りの音楽でした。それがショパンの作曲技法に多大な影響を与えています。ベルカント唱法とかコロラトゥーラ唱法というオペラの歌い方をそのままピアノ音楽のメロディーに取りいれています。コロラトゥーラ唱法を思わせる美しいメロディーでできているノクターン第2番変ホ長調 Op.9-2 とうっとりするような息の長い美しいメロディーでオペラの類似性を指摘されているピアノ協奏曲第2番へ短調 Op.21 第2楽章（ピアノ独奏版）を弾かさせていただきました。=写真下=

ピアノ協奏曲第2番は、1996年に札幌でポーランド国立放送交響楽団と初めて弾きました。遠藤道子先生に「大変な曲だけど、がんばりなさい」と励ましていただいたことを思い出します。今回はピアノ独奏版でオーケストラの部分もピアノで弾きます。いろいろな方の編曲があったのですが、オーケストラの雰囲気がよくでているアール・ワイルド版を選びました。今度はナショナルエディションで弾いてみたいと思っています。



〔第3部〕は バラードの誕生について。
～ミツキエヴィチやヴィトフィツキなどポーランドの詩人たちがショパンに与えた影響。バラード第1番が、その後のショパンの作品に与えた影響を考える～

音楽の歴史上バラードという分野を初めて作った

のはショパンで、どうして文学のジャンルに音楽を持ってこようとしたかという疑問に、新書簡集が多くのヒントを与えてくれています。

まず歴史的背景に原因があり、18世紀の後半、ヨーロッパで民族主義運動が起こって自分たちの民族の文化のバラードを復活させようという動きがあり、ちょうどショパンの時代の1820年代のポーランドにもバラードブームがあり、ミツキエヴィチとヴィトフィツキの2人の優れたバラードの詩人がポーランドにもいました。特にポーランド最大の詩人ミツキエヴィチはショパンとの関わりが深く、ショパンはミツキエヴィチについて、1827年1月8日と3月12日の友人宛の手紙で書いています。バラード1番と同じころに作ったポロネーズ第1番、ノクターン第7番は作風、音楽の作り方がバラードに似ていて叙事的で物語を感じさせる作品になっています。バラード1番は、「幻想曲」などのその後の作品にも影響を与えていくのです。



そして高橋健一郎さん=写真右上=がバラード第1番短調 Op.23 を力強く、かつ美しく弾いてくださいました。バラードはポロネーズやマズルカでもないのにポーランド民族的な感じがするというのが印象的でした。やはりショパンの音楽の一番の根幹にあるのはポーランドなのだと思います。

三浦先生=写真下=が編集者のスコヴロン先生に尋ねたところ、第2巻は2013年末、第3巻は2020年に予定されているそうです。ショパンのナショナルエディション、いわゆるエキエル版が出版されたときも、ショパンの研究の進歩に驚いたものですが、ますますショパンの実像を知ることができることに期待



は膨らむばかりです。三浦先生のショパンの深い理解と洞察力に裏付けられた、機知に富んだお話をもっと聴いていたかったです。またぜひ次の機会を待ちたいと思います。

(やすだ・あやこ)運営委員